

不活化ポリオワクチン接種をご希望の方へ

～予防接種に欠かせない情報です。必ずお読みください。～

1. ポリオ（急性灰白髄炎）

- ①ポリオ(急性灰白髄炎)は、ポリオウイルスによる急性ウイルス感染症であり、急性弛緩性麻痺を呈します。
- ②ポリオウイルスは抗原性によって、1型、2型、3型の3つに分類されます。
- ③ポリオウイルスに感染しても、ほとんどの場合(90%以上において)、不顕性感染であると言われています。軽症例では軽い感冒症状、または胃腸症状のみで回復する事が知られていますが、重篤な場合、呼吸筋麻痺や球麻痺等により死亡する場合もあり、発症後、筋力低下、筋緊張低下および筋肉萎縮が永続的な後遺症として残ります。
- ④ポリオの発症は、感染者200例中1例程度と言われています。また、ウイルス感染から麻痺発症までの潜伏期間は、3日から1ヵ月程度までと様々ですが、多くは4～10日程度とされています。
- ⑤基本的にポリオに対する治療薬は存在しないことから、ワクチンによるポリオ発症予防および流行阻止が重要です。

2. ポリオウイルスによる感染を予防する不活化ポリオワクチン

- ①不活化ポリオワクチンは3価のワクチンです。有効成分として、D抗原量で40単位の不活化ポリオウイルス1型(Mahoney株)、8単位の不活化ポリオウイルス2型(MEF-1株)および32単位の不活化ポリオウイルス3型(Saukett株)の3種類を含有しています。
- ②不活化ポリオワクチンの接種は、初回免疫については、標準として生後3ヵ月から3週間以上の間隔をおいて3回接種します。1回目の追加接種については、初回免疫後6ヵ月以上の間隔をおいて1回接種します。
- ③不活化ポリオワクチンの初回免疫および追加接種により高い免疫原性(感染から体を守る力)が示されますが、その力は経時的に減弱します。
- ④4-6歳を対象として実施した試験において、2回目の追加接種により一度減弱した免疫原性が再度高まることが示されています。
- ⑤不活化ポリオワクチンの接種後に、他のワクチン接種でもみられるのと同様の副反応がみられますが、通常は一時的なもので数日で消失します。最も多くみられるのは接種部位の発赤(赤み)や腫脹(はれ)です。また発熱が接種された人の数%におこります。重い副反応として、次のような副反応が報告されています。(1)ショック・アナフィラキシー、(2)けいれん。
- ⑥このワクチンは、製造の初期段階に、ウシの成分(米国、カナダおよびオーストラリア産ウシ血清)が使用されていますが、その後の精製工程を経て、製品化されています。また、このワクチンはすでに世界90ヵ国以上で使用されており、1993年1月から2011年6月までで2.7億接種回数以上が販売されていますが、このワクチンの接種が原因でTSE(伝達性海綿状脳症)にかかったという報告はありません。したがって、理論上のリスクは否定できないものの、このワクチンを接種された人がTSEにかかる危険性はほとんどないものと考えられます。

3. 次の方は接種を受けないでください

- ①明らかに発熱している方(通常は37.5℃を超える場合)
- ②重い急性疾患にかかっている方
- ③このワクチンの成分によってアナフィラキシー(通常接種後30分以内に出現する呼吸困難や全身性のじんましんなどを伴う重いアレルギー反応のこと)をおこしたことがある方
- ④その他、かかりつけの医師に予防接種を受けないほうがよいといわれた方